

戦士

号外

六九二〇

社会主義学生同盟
関西地方委員会

I 序文

日本階級闘争の歴史的転換と学生運動の転換を
七十年代権力闘争の勝利に向けて闘い抜け

II 第三次安保闘争における組織された暴力の位置

- (A) 第一次安保闘争の総括
- (B) 東大闘争と日本階級闘争の新しい質
その総括と我々の任務
- (C) スローガン

III 資料

全学共闘会議全国評議会結成アピール（案）

I 序

日本階級闘争の歴史的転換 II 学生運動の転換を

七十年代権力闘争の勝利に向けて闘い抜け

六八年の全世界 II 日本の階級闘争がその激動を相互にからませながら「革命の現実性」に一步接近した中で、六九年初頭の東大から日本階級闘争をして具体的な「革命の時代」に突入せねばならぬことを告げ始めた。

六八年の闘いの深さが、十・二一闘争へと集大成されて爆発したとき、それは内乱への萌芽的様装を呈しつつも、それを持続し全人民の蜂起へと永続化する展望をもち得ないまま一つの鋭い政治の波として終った。だが、その背後での帝国主義の専制的再編とそれに抗する自然発生的な全人民の反乱は、旧来の運動と組織からの分解流動として始まっており、何度かの瞬間的な街頭政治闘争への流出としてあらわれていた。このエネルギーが飛躍して階級闘争の政治的エネルギーに形成されるには、組織された暴力部隊と闘いの陣地・拠点が必要であった。

安田攻防戦を象徴とする東大闘争は、全人民の流動に対する明確な展望を与えるものとして登場した。同時に権力と人民の政治的構造を中間的なものを取り去った赤裸々なものとした。したがって学生運動はもとより、あらゆる階級闘争の戦線に巨大な流動を引き起し、歴史的な構造転換をつきつめるものとなった。今や古いものと新しいもの一切が、旧来の運動と新しい運動に踏み込んでいく。人々は誰でも自らの政治的、思想的立場を選りわけることが、即その暴力闘争の現実を含めて、いづれを認めるのか、と問われている。

東大闘争の「安田攻防戦」の事実と質を、直ちに全国の大学、職場・全人民の中に波及させることができなかつたとしても、その政治的、思想的影響は間違いないく多様な形で伝わっており、とりわけ全国七十数大学の闘争を通して学生の闘いがそれを物語っている。

東大・日大・中大をはじめとする東京の闘いと、それに呼応しつつ全関西をおおいつくしている京大・立命・阪大・市大・関学・神戸大の闘いは、いづれも封鎖・入試阻止への道を展望する中で大きな社会的流動のうねりを形成しており、東大闘争を引きつぐものとして歴史的な階級闘争の転換を先行的に担っている。

六八年階級闘争の突破口となった六七年十・八闘争以来、我々が常に提起し続けてきた「組織された暴力」「ソヴェトリア国際主義」は現在大衆闘争の現実として実現されている。また全人民的政治闘争と反帝統一戦線とを軸とした階級闘争の過程で実現されている。だからこそ、われわれはこれまでと同じ次元では不十分であり、その言葉自体が、現下の階級闘争の広さと深さと質にともなうて具体化されねばならぬことを知っている。なぜなら、従来われわれが主張した政治的内容はすでに広汎な運動の潮流・戦線的な大衆によって語られ始めており、革命をめぐるといって階級闘争が要求する党派闘争のさ中では、より高度のしかも具体化された革命派の指標が提起される必要があるからである。それは「反帝統一戦線」II「ソヴェト運動」によって提示されねばならない。

われわれが反帝統一戦線IIソヴェト運動について提起する場合は、その現実的な条件を流動的な闘争実態とそこで生まれつつある新たな団結形態の中に発見している。それは部隊としての金学連・反戦と闘争拠点としての大学（占領闘争遂行中）・三里塚をはじめとする地点、そして全共同によって生み出された新たな団結によって結合しはじまっていることなのだ。大衆の戦線的・政治的団結がブルジョア権力を物理的に打倒する方向を内包している

事実こそ注目すべきである。だが、それが局部的なワタを越えて全人民の広さをもって権力との軍事的・政治的戦闘を継続するためには、何よりも闘いの実態を維持せねばならない。しかもこの闘いが告白する真の意味を、革命を実現する永続的な展望で包摂することが必要となつていく。われわれはそれを「全人民の革命的パレード」と政治的パレードの構築とすべきこととして

従来、現地闘争と街頭政治闘争の場をつくり出されてきた金学連と反戦の結合が、東大での「労学集会」として新たな段階を生み、更に東大闘争で「反戦のクラス入り」という事態を生み出している。これは物量として学生運動を反戦が補完しただけでなく、個別闘争の特殊性と歴史性を伴った運動過程に普遍的政治を直接に介入させた。しかも反戦の青年労働者の内部で「インテリゲンチア」としての能力がそれを支えたとはいへず、六八年階級闘争と東大闘争の新たな事態の中で自己の政治経緯と、革命の現実性を生産点占拠から権力と秩序への長期の戦闘に立つことを自覚し始めたことに起因している。それ故に地方の攻撃と秩序と古い運動との闘いを通して、戦后労働運動の敗北が築きあげた巨大な壁を、政治実力闘争と結合した地域政治闘争・地域労働運動によって突破口を切り開きつつある。同じ運動の秩序の中で左から右かを争った時代とは全く異質の政治と組織のみがそれを発展させる保障である。だからこそその政治が大学闘争の中で生じた「大学解体」「安保闘争の拠点化」と同質のものとして、そしてそれを闘い抜いていく学生との団結を最も強く要求し、更に組織形態が権力打倒から自らの権力を展望する反帝統一戦線IIソヴェト運動の方向において要求されているのだ。

日本階級闘争の到達した段階が、一切の階級闘争を巻き込んだ激動の中で、革命の現実性II権力闘争の開始をもって鮮明な軸を形成している。大学闘争がその最先端を引き受け歴史的な階級闘争の飛躍を死にもの狂いで開拓し定着化させようとしている。権力の攻撃が、一時的な帝国主義的専制に向けての再編と統合を要求すべく、暴力的に中間派の戦線・屈服を迫って「革命派」に向けられている中では、物理的犠牲は大きい。だが安保闘争それ自身がかかる対決こそ真の闘いとし、七十年代の攻勢が暴力をめぐる本格的な闘いへ突入せざるを得ない限り、この時期のこの闘いは不可避なものである。

闘いの火の手は余りにも数多く同時的であらうであり、大衆の流動と噴流はかつてなく普遍的で大規模であり、そして闘争の進展と局面の変化は余りにも急速で目まぐるしい。このような事態の中で、われわれが従来通りの手工業的な人間関係と現場指導で対応するだけでは全く不十分である。全人民の軍事制パレードと全人民の政治的・思想的パレードの構築を同時に遂行すべく、学生・青年労働者の武装行動隊の形成と全共同評議会形成への具体的第一歩が開始されねばならない。反帝統一戦線IIソヴェト運動の内容はそこから開始されるであろう。

以上の如く、現在の学生運動の位置が、階級闘争の全面的な構造転換と飛躍の集中心にあり、それゆえ歴史的な転換を遂げつつある。このことは、戦后学生運動の歴史の中で、五十年レッドハト闘争への過程で訪つた転換II学園復興・平和ヨウゴ闘争から反戦・平和（反戦）闘争への転換IIと、六十年安保闘争への過程で訪つた転換II五六年八中委九大（平和と民主主義闘争）への転換IIにつぐ三度目の転換としてある。かつての学生運動の転換がすべて日本階級闘争の転換と照合してきたように、現在の

また七十年代階級闘争への転換を投写している。

また、現在の学生運動の転換が過去のいづれの転換とも異なり、それゆえ日本階級闘争の転換が過去のいづれの転換とも異なり、提起している問題の重大さは、七十年代階級闘争が権力を握る全面的な暴力闘争として展開されるということも、現在の闘いがすでに開始し始めていることである。それゆえ、革命の展望が、具体的軍事戦略の配置と行動として要求され、したがってブルジョア権力打倒から新たなプロレタリア権力樹立への無畏を、具体的統一戦線ソウヴェイト運動として開始することを要求されている。

この運動の転換や飛躍は、紙上のプランによって、出陣の論理のまま美しくなされるのではなく、現在のような激闘・混乱と複雑な闘いの過程の中で、一定の期間を通して鮮明になる。学生運動はまさにかかる過渡期のまっただ中にあり、闘いの尖鋭を通して七十年代階級闘争への先駆を担っている。

Ⅱ 第3次安保闘争(70年代)における

組織された暴力の位置

(A) 第一次安保闘争の総括

へはじめに

① 東大・日大闘争を学閥闘争として把握する事は極めて一面的である。闘争の出発点が学閥問題にあったことは事実であるが、安田講堂の攻防戦は、この闘争がいかなる質をもっているかを鮮明にしたのであった。

まず、七十年安保闘争が、いくつかの拠点II解放区を軸に開始されようとしていることである。すなわち、社共の組合主義、議会主義的統一戦線とは独自の統一戦線(拠点解放区)が、いくつが形成されたことである。

この拠点II解放区を形成した上で70年闘争は、従来の日本階級闘争史上に於てなかったような事態をひきおこそうとしていく。それは戦後日本の進路を決定した49/52年の講和条約をめぐり、両階級の攻防戦を想起させるし、われわれは、この戦後史の転換点と同じほど深い内容をもった時代に生きているのである。敵階級は、この拠点をもちた70年闘争に直面し、異常なほどの警戒を開始した。日本の政治家は、その官僚的体質から、いまだこの拠点をもちた70年闘争の階級的性格を充分つかんではいないが、直接経営にたずさわっている企業家グループや行政官僚及び治安当局は、非常な警戒心を見せている。

現在70年闘争の拠点は、①全学連(全学共闘)として出現し、②反戦、③三里塚、④山谷・釜ヶ崎、がその最左翼を形成し、⑤沖繩、⑥国労、がそれにつづいていく。これらの復讐拠点の中心軸は、東大・日大闘争を背景にした全学連であった。日大闘争に対する敵階級の反撃は、それゆえ、70年闘争の最大の拠点对する攻撃でもあったのである。したがってこれに対するわれわれの対応は、形取されつつある拠点(反帝統一戦線)の総力をあげてこれに反撃することがせまられていたのであった。

この総力をあげての反撃のなかで、われわれは、安田攻防戦をつくりあげた。この時点で城を明けわたした党派については革命を語る資格はない。われわれは、東大闘争に対する権力の介入を拒否することを出発点としたが、それを戦時期間の攻防戦として闘争状況をつくり出すことは成功した。

東大闘争総括のなかで、まず確認されねばならないことは、この闘争が計画的にしか長期にわたって継続することの階級

日本学生運動の革命性と戦闘性の伝統が、七十年代階級闘争を押し進め、くまなく展開された任務を完遂するため、今こそ社会主義学生同盟の責任は重大である。われわれがこの激動の中で唯一革命への永続性を覚悟し、あらゆる戦闘の中枢を引き受けている。あらゆる学生は、われわれの下に結集し、われわれと共に闘い、抜き、われわれと共に歴史的な革命闘争の任務を全うすることを呼びかけなければならぬ。

すでに全開の大学占拠闘争は、権力の集中攻撃との攻防を開始しており、数日のうちに全面戦へと拡大するであろう。右翼・日共の登場と中間派の分断もそれとともにより顕在化するであろう。全開の激しい単一の戦術配置の下に統合されて、権力との攻防戦を展開し、右翼・日共との闘いに勝利せねばならぬ。

東大闘争の巨大さは、全開の激しい爆発によって始めて社会的に定着し、真の革命的危機を引き起こす突破口となるであろう。

この意図を明らかにすることである。たしかに反帝統一戦線は、この安田攻防戦をただちに、全戦線に拡大し、そのことを通じて、敵階級に反撃する力量はもっていた。だが、この攻防戦は、①全国学生運動の質を一段と高めた。②拠点II解放区の構の結合と、単一指導部の形成の必要性を提起したこと。③ボク大を大衆が、反帝統一戦線に結集するための条件を形成したこと。を評価することが出来る。

この東大・日大闘争を頂点とする学生運動の総括は別稿にゆずり、ここでの問題提起は全階級の視点から、東大・日大闘争の階級的意義を明確にすることに力点をあきたす。

〈サ条約をめぐり階級闘争〉 四九/五二年

(一) 問題の設定

我々は今、49/50年の階級闘争の総括を必要とするのは、次の理由に基く。49/52年、いわゆるサ条約と日米安保条約(第一次)をめぐり階級闘争は、日本共産党の武装闘争方針が語られた時期であり、「中核自衛隊」のもとに、日本階級闘争史上最初に、プロレタリアートの「組織された暴力」が登場した時代である。そして60年安保(第二次安保闘争)に於いては、このいったん登場した「組織された暴力」は再び登場しようとしているのである。それは、現段階では、組合主義的、議会主義的統一とは独自の、幾つかの闘争拠点を形成するに至っている。

従来の革命的左翼の日本階級情勢の把握は、55年以来成立した、総評の日本共産党を軸としていた。それは、革命的左翼の思想的系譜が、日共国際派に由来していると共に、武装闘争が敗北する中で、日共所感派も、この闘争を清算し、火炎ビン闘争は極左冒険主義でもあった。見解が、火炎ビン闘争の総括を十分に出さないまま、支配的なものになったことによる。そして革命的左翼も、火炎ビン闘争に対する具体的な検討を抜き、極左冒険主義というレッテルを貼ってきたのであった。

現在「組織された暴力」が再度登場し、その力をもって、自治会や労働組合に代わる新な闘争の形態(全共闘や反戦等)が拠点として形成されつつある時、第一次安保における「組織された

暴力」を具体的に検討し、その総括をふまえることが不可欠の問題として、提起されているのである。

(一) 分析の視点

では、我々は、戦後日本の転換点である49〜52年の階級闘争を、如何なる視点から分析する必要があるだろうか。まず、火災ビン闘争を、単に、党の指導の問題に一元化してしまふのではなく、まさしく、戦闘の大衆がとらざるを得なかつた、運動形態として分析することである。いかにすれば、どのような階級情勢のもとで、暴力闘争の形態が形成されたかを検討することである。

そしてこうした階級闘争の全面的総括をふまえてはじめて、党の指導の問題を、階級情勢の成熟の度合いとの関係において検討することが出来るのであり、このことを明らかにすることによつて、はじめて、指導上の総括として、今後の活動に生かされるのである。

次に分析のいくつかの基本的指標についてふれておかねばならぬ。国際情勢は、反ファシズム・米ソ密月の時代から、冷戦の時代への転換期であつた。日本資本主義は、金融・官僚機構の再編成を終え、大独占企業の企業整備を前段的に押し進めた時代である。この国際情勢の激的な転換のなかで、アメリカ帝国主義は、北朝鮮の成立により、効果的に介入すべく日本との講和を急いでいった。この戦后史の第一の転換点において、日本共産党は、占領下革命論という馬鹿げた方針の無残な破産に直面し、その結果、闘争派と所感派に分裂した。

このように大づかみの状況の中で、我々が注意を払わねばならぬものは、①中道内閣のもとでの賃金ストップ政策に対する労働者の闘争、②企業整備に対する労働者の闘争、③在日朝鮮人連帯運動に対する闘争、④レッド・パージに対する闘争、⑤労働ストップと火災ビン闘争の諸点である。

そしてこの時期の階級闘争の質は、講和が提起された51年を境にして、その内容を変えていることに注目しておかねばならない。

(二) 中道政権下の階級闘争（47・48年）

二・一ストに結集した労働者階級のエネルギーはストそのものに坐折しつつも、中道内閣をつくり出した。この中道内閣の成立は、それまで賃金ストップライキが、食糧危機と結合し、対政府ゼネストとして発展してきた大衆闘争の発展方向に歪みを与えることになつた。この対政府ゼネストの発端を押し止めた実際の力は、占領軍の力であつた。だが階級意識の形成されている日本労働者階級は、社会党首班内閣の成立をみたとき、対政府闘争の目標を見失ふ。この中道政権に、民主化を期待したのであつた。こうした時期に日本共産党はゼネストによる人民政府樹立と占領軍の圧力により失敗に帰したことから、その方針を「地方権力に対する地域住民闘争」へと切りかえ、大衆の自然発生性に押起し、てしまつたのであつた。

だが、労働組合を中心としたストライキ闘争は、この時期においては、依然として最も有効な闘争形態であつた。共産党の指導が、地域権力の確立におかれ、労働組合を地域権力闘争へと引きまわしていかねばならぬ。労働者階級は、中道政権の賃金統制（ペーパースタンプ）に対するストライキ闘争へと再度決起していったのであつた。そしてこの時期のストライキ闘争の担い手こそ、民間と称される組合活動家であつた。

そしてこの時期のストライキは、共産党の地域人民闘争の影響もからみ、職場離脱、集団欠勤、等の「山猫争議」が拡がった。この地域人民闘争は、権力闘争（権力奪取のための戦略）として提起されていたにもかかわらず、その政治的内実が占領下平和革命論（アメリカ占領下で、人民政府をつくる）であり、実際の闘争スタイルも、極めて、改良的要求であつた。

このようにみるならば、すでにこの時代から、民間が指導権をとつた。労働組合のストライキを基本とした運動形態と、それとは相対的に独自の、共産党指導下の地域人民闘争とが並存していた。この地域人民闘争発生の客観的根拠は、労働組合（産別会費）を中心とした対政府ゼネストが、占領軍の力によつて歪められ、なかつた。この占領軍の力に対する有効な闘争方針を提起しえぬ段階においても、単なるゼネストでは不足する階級闘争の労働者が露出し、地域へ進出したことを意味している。

問題は、ゼネスト形態と、地域人民闘争を統一的に把握し、結合して闘うことであつたか、それには、アメリカ占領軍に対する闘争を、全国的な政治闘争を背景に中央権力闘争として、展開することかせまらされていたといえる。だが、当時の社、共は、いずれも、労働者階級の闘争の部分に立脚し、お互いに純粋化していったのであつた。

(三) 企業整備に対する労働者の闘争

49年、50年、当時の企業整備の中心軸は、人員整理におかれ、そして、この人員整理を遂行するためには、労働組合の抵抗を打ち破ることが不可欠の前提であつた。そして、労働組合の抵抗を弱める近道は、活動家を解雇することである。したがつて、ドッジラインの下での企業整備は、レッド・パージを主軸とした人員整理として打ち出されてきたのであつた。

この資本の攻撃に対する労働者階級の反撃は、全体として不発におつた。その主体的要因は、社・共の対立がもたらした、労働組合のストライキ闘争と地域人民闘争の分離であり、労働者階級内部の戦闘的部分と離れた部分の対立であつた。共産党は、労働組合のストライキ闘争と、地域人民闘争を、連続性といはし一連の戦術系列として把握できず、分離して理解した（赤色組合主義）ことにより、結果的には、労働運動の指導権を民間に明け渡したのであつた。そして権力は、この労働戦線の分裂に着目し、そのサケ目を一層ひきささるることを展望した上で、企業整備攻撃をかけたのであつた。

49年の大規模切り攻撃に対し、労働者階級は果敢に闘つた。ストライキを背景とした街頭行動がずいぶんくりかへらされ、その結果労働組合のストライキを中心とした地域闘争が形成されつつあつた。（神戸川二代会議）すなわち、個別労働組合のストライキ闘争で、社会的に進行した大量前切り攻撃をはねかえすことは出来ず、個別労働組合のストライキを横に結合し、地域的に闘争展開を形成し、その力によつて、全人民的政治闘争へと発展させてゆくことが問われていた。にもかかわらず、共産党の地域人民闘争は、自治体闘争にすぎなかつた。それは個別労働組合のストライキがもたらした壁を打破する質でもって闘われたのではなく、ストライキと地域闘争とが切断されたまま提起されていたのである。

こうした共産党中央の無能な対応にもかかわらず、下部労働者は、いたるところで、自治体闘争とは異質の人員整理反対の地域共闘をつくりあげ強力な抵抗闘争を組織した。この労働組合と地域共闘の強力な抵抗のなかで権力は下山事件にはじまる一連のフレームアップを仕組むと共に、レッド・パージを計画するのであつた。そしてこのフレームアップをレッド・パージは、社共の対立を逆手にとつて下部労働者の間で進んでいた地域共闘をも粉砕しようとするものであつた。

(四) 朝鮮民族問題の特殊な位置

企業整備に反対した、個別労働組合のストライキと、それを軸とした、地域共闘（地域闘争展開の成立）は、企業整備という問題を個別組合の視点からではなく、全人民的視点から分析する主体をつくり出した。この時期の階級闘争はしたがつて急速に、アメリカ

カは朝鮮に対する批判（ポツダム宣言違反）へと流れていった。そのとき焦点を形成したものが朝鮮問題であった。48年の朝鮮人使共編成が成立するなかで、アメリカは反共政策を強化していったが、その矛盾は、在日朝鮮人のなかには集中的にあらわれた。すなわち、「祖國二分」という民族抑圧の実行者が、アメリカ帝国主義であり、それゆえ、在日朝鮮人の闘争は、アメリカ帝国主義との対決を軸とせざるをえなかったのである。

これに対し、GHQは、一方で未だ萌芽的であった、朝鮮人の運動を非合法化するとともに一方で講和条約の問題を推進し、そのことによってポ宣言の幻想を持続せよとしたのであった。この在日朝鮮人連盟解散が後のレッドハージへの突破口となったことをみると、先進国における少数民族の問題と、それに対する國策主義の観点よりの指導方針の重要性を強調しすぎることをい。このとき、何よりも必要なのは、朝鮮人に対する弾圧の政治的意義を明確にし、全人民的反響を開始することでもあった。この問題に対応出来なかった社会は、やがて自らも在日朝鮮人と同等の運命をたどることを知ったのである。

六 講和論争とレッドハージ (50・51年)

かくて、朝鮮戦争を背景とした共産党の非合法化による戦時的弾圧の弾圧と、一方講和論争の提起による國民的結集が、GHQと日本政府によって進められた。そしてこの権力の意図は、レッドハージを成功させることにより、ムゴに貫かれ、敗戦直後の階級闘争の昂揚は、この段階で最終的を結着がつけられたのである。

このレッドハージに対する敗北はどのようにして生れたのであるのか。49年企業整備反対闘争において、個別労組のストライキを軸に、地域共闘が形成されたことは、先にも述べた。この時点での問題は、地域共闘を、個別課題に対する地域支援行動から全階級階級闘争展開へと高めてゆくことでもあった。だが、こうした指導は何らされず、闘争・全通を軸に形成された地域共闘は、フレームアップによって粉砕されてしまったのである。この権力の強力な攻撃の中で、日共と民間派の対立が、一層深まった。民間派は、アメリカ型の「反共」思想でなく、戦時的組合主義がその中心的内容であった。この日本型民間の左翼性は、日本の赤色組合主義の体質に負っていた。すなわち、日共と民間は、同じ戦時的組合主義の両翼、すなわち政治主義と経済主義を代表していた。それ故、労働組合運動と無媒介な地域への進出（日共）と労働組合という枠の内へのためこもり（民間）として両者は対立したのであった。権力はこの対立に注目し、レッドハージを政治活動への弾圧として提起し、労働組合に対する弾圧ではまいかの如く宣伝し、民間をその土俵へとさそい込んだのであった。それ故、部分的には、労働組合機関がレハの下手人としてなら現われ、断絶ももった。これに対し、日共は、労働組合とは相対的に独自の闘争隊列をきずくことかできず、せいぜい法廷闘争を展開したにとどまったのであった。

七 労働ストと火災ビン闘争

これまでの分析の中で、我々が注目しなげはならないことは、労働組合を軸とした合法論争が、戦時化の中で、GHQの暴力と衝突し、粉砕される中で、より強制的な閉鎖形態が求められていたことであつた。この合法次元の闘いの壁を打ち破るべく、労働者階級は地域的に結集し、新たな戦列を組もうとしたのであった。これが日共指導の地域人民闘争が展開された自然発生的暴発であった。従って、この時代に要求されていた地域闘争の質は、労働組合のストライキによって、打ち破ることのできなかった壁を、どう打ち破るか、集中されねばならなかったといえる。だが日共の指導は、そういう方向ではなく地方自治体闘争へと登小化させ

ることによって、労働組合と地域闘争とが切断されてきたのである。

こうした状況が、サ条約・安保条約の締結の中で、吉田内閣のもとに連立内閣が可能なならした条件をつくっていたのである。だが戦時的閉鎖に陥りつつあった弾圧をかけたにもかかわらず、吉田内閣は國民的結集を成功させることではできなかった。それは何よりも、新憲法体制の下で、再軍備と治安体制および労働政策の再編・要請をめぐり、それらサ条約の締結を「解放」と受けとった労働者・人民の反響を呼ぶことでもあったのである。その結果、労働法規改悪反対闘争からはじまり、破防法反対闘争へとひろがられていった。いわゆる労働法規改悪反対闘争（委員会）の結成とゼネスト闘争の展開である。この労働ストは55年以降の日本の組合主義（組合主義的議会主義的統一戦線）にひきつがれ、安保共闘として開花した。その意味では講和問題で、國民的結集に成功しを吉田内閣に対する労働者の最初の組織的攻撃であり、それは、基幹労働組合から、右翼組合主義者を追放した。この労働ストから安保共闘への系譜についてはここでは十分あることではできない。ここで中心的に説明しなげばならぬことは、この時期に、破防法反対の労働ストと同時に、共産党「中核自衛隊」による火災ビン闘争が闘われたことである。

この火災ビン闘争の政治目標は、地方権力の打倒を通じて、人民政府を樹立するという方向であり、当時の労働運動が展開した弾圧を打破する方向とは無縁な方針であったといえる。にもかかわらず、現実には、52年5月から7月にかけて、火災ビン闘争が闘われたわけであり、こうした闘いがいかなる物質的基盤に支えられていたかを明らかにしておく必要がある。

52年火災ビン闘争として闘われた政治闘争の質は、47年片山中道内閣の下での山本内閣闘争、47年ドッジラインの下での企業整備反対地域共闘、50年朝鮮人の闘いの系譜をひかえている。問題はこの闘いの真の政治目標が、一つの運動形態、すなわち、第一戦線形態をもつことかなくったことにある。それゆえ、これらの真の政治目標は、既成の大衆組織に立脚した闘争の補充物であるか、又は、GHQ権力の一翼のもとに粉砕されてきたのであった。

だが、そうした敗北の過程のなかで、おいて戦時的労働者は露出し、階級政党への結集が進んでいった。それゆえ、火災ビン闘争の物質的基盤は、次のように分析出来る。第一に47年と50年の階級の闘争の敗北のなかで、合法組織（労働組合等）が「閉鎖性」の弱点をこえ、新たな閉鎖形態を勝つとることが出来る、したがって、個々の闘争で敗北した部分には、闘争の経験を大衆的に継承することが出来たこと。第二にしかしながら、戦時的労働者は、当時唯一の前衛政党であった日本共産党に結集していったことであり、第三に、51年講和までは、日共が軍事方針を提起したからも、GHQ権力の圧倒的な暴力の前に、その方針を具体化し得なかったが、講和条約の締結とともに、そのようを外圧が減少するなかで、労働ストといった、大衆闘争が再度力をもちかえりなかに、一時的に爆発する条件があったこと。第四に、火災ビン闘争の中心部隊は、レッドハージ等により、労働組合から切断されており、また、大衆と結合する組織も未確立なままであったこと、等である。

このように諸条件が、共産党の体質と結合し、大衆闘争とは無縁な火災ビン闘争として闘われ、その結果階級によって粉砕されたばかりか、内部崩壊していったのであった。

第三次安保闘争における

組織された暴力の位置

(一) 第二次安保闘争、60年

この論争を統一戦線論の視角からみるならば、日共は、社共共闘に安保ハギ、民主連合政府の構想である。社会党は、さまざまな論争をこらえているが、社共共闘派と、反安保実行委員会（総評、社会党中心）派とが主要な対立を形成している。われわれは、全連連・反戦の実力闘争を軸に反帝統一戦線を提起している。共産党の路線は60年第二次安保闘争における安保共闘の延長線であり、社会党・反安保実行委員会派の路線も労働組合機関を中心とした政治的統一戦線であり、この二つの社会主義、社会主義の統一戦線であり、相違点は、共産党が、口先ではプロレタリア戦線を云っているにすぎない。

ところで60年安保（第二次安保）闘争において大衆闘争が何故安保共闘に集約されていったのか、そして60年安保以降、何故安保共闘が破産を宣告されているかを明らかにしてゆかねばならぬ。51年講和、第一次安保をめぐる政治状況はすでに述べた。ここでは、このような政治状況の下に、日本資本主義は復活の道をあゆみはじめたのであり、朝鮮戦争の特需ブームを出発点に急激な蓄積を開始したのであった。そして60年第二次安保は、その10年間の資本蓄積を背景に、内的膨張から外的膨張への一歩を進められたのであった。

したがって51年講和（第一次安保）の時期に展開された第一次の「組織された暴力」は大衆化する条件が非常に少なく、むしろ合法的大衆組織の機能を回復する役割をはたしたのであった。そして日本資本主義が内的膨張を軸に蓄積していった時代においては、民主化運動がそれなりの成果を挙げ、一方合法的大衆組織を発展し、民主主義闘争の徹底化を通じて、階級的団結を形成することが目標にされるようになったのである。これが52年、50年の階級闘争の特質であり、このような特質が「平和と民主主義の定着」といった現象を生み出したのであり、決してこの道ではない。そして、大炎ビン闘争は一夜の悪夢として忘れられようとしているのである。

また注意深い観察者であるならば、この合法的大衆組織が、民主的諸権利を獲得し、また、その組織を強化していった過程が同時に合法的大衆組織の限界点への接近であったことを見なくてはならない。われわれは合法的大衆組織の基幹を形成している労働組合の状況を分析するなかで、この弁証法的論理を具体的に明らかにしよう。

今日の総評は、50年に結成された。当初はアメリカ型の反共労働運動を軸として形成されたが、労働ストライキを軸に、ニワトリからアヒルへの転換をなしとげ、55年以降春闘方式を提唱し、今日にいたっている。ところで民間大企業労働組合がストライキ闘争を闘いえたのは57年の鉄鋼・造船ストの頃であり、一方総評を中心として、労働組合機関が政治闘争の中心となったのは60年安保闘争までであった。そして、公労協の賛闘も4・17スト敗北前後から低帯を深めていた。いわば、民主主義闘争が合法的大衆組織の運動として展開される際、一つの壁につきあたるのである。

この壁中の内的膨張を通じて復活した日本帝国主義が、経済・軍事・治安の面で強大な力をたくわえたことによる。資本家階級は、労働組合に組織された労働者を、労働組合の団結よりもっと強固な直接支配をなしとげようとしているのである。五二年以来の合法的大衆組織の運動の展開は同時に資本家階級の労働者に対する直接支配の強化の過程であった。この資本家階級の

ちかじかしているのである。したがって階級的観点からみて必要なる闘争も、大衆組織の側が受け入れなくてはならないのである。

（くわしくは、共産同発行、パンフ「労働運動の現状と展望」一五〇頁、参照）

(二) 第三次安保闘争 70年

日帝が内的膨張を軸としていた時代においては、合法的大衆組織の運動領域もそれなりに保障され、資本家階級の直接支配は目に見えておられることはなかった。たか六十年で外的膨張への第一歩を踏みだし、六五年日韓条約を突破口に、その第二歩を踏み出した。なかで、資本家階級の直接支配が一層はげしくなってきたのである。そしてこのあまりにも強力な国家体制に對しては、労働者の運動方法や、政治指導の問題では全く、帝国主義が労働者人民に對する支配の力を強めていることにあるのである。こうして六十年以降、合法的大衆組織の力は弱まり、体制内化し、労働組合機関は政治闘争を担えなくなってきたのである。労働組合機関を中心とした社共統一戦線は破産を宣告されているのである。

六七年十・八以来顕在化した第二次の「組織された暴力」はこのような時代に登場した。それは既成の大衆組織が力を失うなかで形成されつつあり、五〇年代の第一次の「組織された暴力」が出現した状況とは全くちがった条件のもとにきわめて大衆的に形成されたものである。

帝国主義の専制支配が強化されてゆくなかで、大衆はそれに対して反発し、帝国主義と真向から対決する闘争を要求している。それは合法的大衆組織によって解決しえない要求である。組織された暴力による反帝統一戦線の形成は、このような階級闘争の構造変化のなかで進んでいるのである。以下、学生運動にそくして、組織された暴力の任務を明らかにしてゆこう。

(B) 東大闘争と日本階級闘争の新しい質

その総括と我々の任務

(一) はじめに

共産主義者同盟七回大会は、70年階級闘争の標を、帝国主義の侵略、反革命に對決する軍事・外交闘争、帝国主義統治機構への全社会的再編に對する闘いとして提起した。

今我々は、この二つの闘いが併行して同時に絡み合いながら展開している時点を経験している。これらにはもはや別々の闘い、個々バラバラの個別的闘いではなく、明確に帝国主義権力との闘争の一つの戦線に統合されねばならない。それによって、始めて、日本階級闘争に新しい質を附与するものとして全国学生闘争が発展し、ソヴィエト運動を包含した全人民的政治闘争を生み出し、二一以降の権力と反帝統一戦線との均衡局面の突破を可能にする。ここでは、十・二一闘争と東大闘争の総括を通して、大学をめぐむる権力との攻防戦の70年全人民的政治闘争に於る政治的意義を明らかにし、我々が獲得すべき目標と展望を明らかにしたい。

(二) 「学園闘争」の新しい質

この一年間、全国各大学で闘われてきた学園闘争の質は、もはや民主主義的改良闘争をけるかにこえたものとして現われている。たとえその質いか、当初改良的要求を求めて闘いが開始されたとしても、闘いの進展の過程で、要求の実現によって終息することなく、逆に、闘争それ自身が、大学に於る帝国主義の支配を統治の構造を暴露し、それに対する階級闘争の基本的質を展開する媒介となるところに根本的意義がある。

事実それらの闘いに結集される大衆の意識と要求は、この直接的要求スローガン、前途に、日々直感的に感じとっている。この

大学の内幕に巨資本と官僚の少着による専制と腐朽化の中に、それぞれ分断されつつ、末端まで集約されつくされておき、その様を大学の機構が帝國主義の全社会的統治の一環を形成しているという事実IIに対する敵対がある。それは、ここ数年間連続的に拡大して語られた学園闘争が、一定の改良の果実を獲得してきたにもかかわらず、それと引換えて、資本と官僚との安着による専制と腐朽化を深めることによって今日の大学が作り出されてきた事に根拠をもっている。従って改良の成果そのものも、この大学の構造総体を打ち砕かない限り、一時的幻想としてしか存在しえない事を明らかにしてきた。

従って、今日の「学園闘争」では、全社会的に進行している巨資本と官僚と暴力装置との結合した専制と腐朽化による権力と資本の尖兵を目の見主義、排外主義として形成し、諸階層を分離し、分断された大衆を強権的な統治機構の下に再編成してゆく帝國主義の全統治構造の一環を爆破し、解体していく質を根拠としている。東大闘争は、ほぼ一年にわたる闘争を経て「東京帝國主義大学解体」のスローガンを、日大闘争は、「古田体制打倒」のスローガンを獲得した。

この二つの闘いの終極点ではなく、まさに新たな闘いの出発点である。それは大学の民主主義的競争を遂げて、漸く帝國主義権力との攻防戦に向けての基本的な「政治」の地点に到達したのであり、ここから帝國主義との競争をめぐって共産主義者とサンディカリズム、改良主義者、反革命秩序派との党派闘争が始まり、大学をめぐる攻防戦が、全人民的政治闘争の一環として登場してくるのである。

三 「学園闘争」と全人民的政治闘争

70年安保をめぐる帝國主義の侵略反革命抑圧に対決して闘われてきた全人民的政治闘争は、10・8以降帝國主義の政治的抑圧の最も直接的表現である治安体制を、街頭暴力闘争をもって突破しつつ拡大してきた。それは一方で砂川・三里塚という拠点を内部に形成しつつ、他方で、10・21防衛庁・新宿・御堂筋占拠闘争の闘争に冠たる大衆を結集し、政治的流動をつくり出してきた。この全人民的政治闘争の根本的特質は、単なる政策阻止闘争ではなく、帝國主義の全世界的再編成の一環に、自から侵略反革命として登場し、その過程で國內の全階級を再編し、集約してゆく日常的存在形態の集中的要としての、日帝権力と対峙し、その権力の解体を要求しつつ、自からの内部にプロレタリア権力への要素を形成していく権力闘争の性格を内包していることである。それ故にこの全人民的政治闘争は帝國主義の統治の構造総体と増々深く政治的対決を不可避につくり出し、その統治のそれぞれの階級を自からの内部に獲得していくことを要求している。

東大闘争の最終局面に於ける権力との非和解的攻防戦が、この安保闘争の組織された部隊によって担われたことは極めて象徴的事実であった。帝國主義統治構造の一環の解体を要求するや否や、それはもはや明確に学園的枠をこえて、帝國主義権力の支配の構造総体の解体を闘いとしていく運動に結合されて始めて、一つの闘いとありえ、新しい位置を獲得していくのである。獲得する位置とは全人民的政治闘争の「根拠地」としての位置である。この位置を獲得することによって、闘いは永続化への腰盤を与えられる。街頭を中心としてつくり出されてきた権力との攻防戦と大衆の政治的流動は、それと同様の質をもった権力との永続的な攻防戦と組織運動をこの「根拠地」の中に獲得し、学園闘争の行きつ戻りつと全人民的政治闘争が獲得してきた質が合流し結実する。ここに今日の学園闘争が環として存在することの意味とそれが全人民的質をもちねばならない理由がある。全人民的政治闘争は、その発展のために、増々数多くの解放拠点としての「根拠地」を形成してゆく。

四 反帝統一戦線と「学園闘争」

我々は、この間の全人民的政治闘争を担ってきた全学連、地区反戦を中心とする部隊を反帝統一戦線として位置付けてきた。反帝統一戦線とは単に党派間の統一戦線ではなく、60年の安保国民共闘とは明確に区別された「統一戦線の最高形態としてのソヴィエト」の現在の表現である。学園が全人民的政治闘争の「根拠地」としての位置を獲得していくということは、運動主体の構造から言いかえれば、学園が反帝統一戦線の拠点となり、大学をめぐる攻防戦の担い手が、反帝統一戦線の拠点部隊として編成され、この攻防戦そのものが、権力と反帝統一戦線との攻防戦として闘われることに他ならない。

それでは逆に、「学園闘争」が反帝統一戦線の闘いの内に包摂されることによって、反帝統一戦線が作り出す質は何か。それは、コンミュニオン運動の質である。このコンミュニオン運動は、「学園闘争」それ自身の発展過程で、大衆の新しい闘争機関として自然発生的につくり出されている。だがそれが「大学コンミュニオン」として、大学だけで独立して確立され、存在し、完結すると考えるのは全くのユートピアである。このコンミュニオンの運動は反帝統一戦線の拠点へと自己を編成し、包括されることによって戦闘的組合主義をこえ、全人民的質を獲得するのである。

同時に、このような運動が全人民的政治闘争の単なる「陣地」をこえるためには、次の点が決定的に重要である。即ちコンミュニオン運動の全人民的質は、自からの内部に全人民の「組織された暴力」の部隊をつくり出し、編成することによって、個別的枠をこえ、サンディカリズムや改良主義への傾斜を防止して、持続しうるということである。学園的枠をこえた戦闘集団であり、組織者集団である「組織された暴力」をつくり出し、あらゆる闘いに各地の学園闘争や政治闘争、更には、工場労働者の闘い、交流に結集し闘うことである。このコンミュニオンの運動と組織された暴力によって学園は「根拠地」をなるのであり、同時に全ての被抑圧階級の戦士の政治的軍事的組織的訓練の「実地教育の学校」となっていくのである。「大学を反帝統一戦線の拠点へ」とはこの事にささるべきである。

五 帝國主義権力の新たな攻撃と大衆の再編

東大闘争に対する権力の攻撃も又、大学をめぐる全人民的政治闘争に対する階級的視点から展開されている。

自民党文教治安グループは、機動隊の大衆導入と常駐による学内制圧、「入試中止」から「閉校、閉校権」の文部省による掌握、「大学院大学」と「専門大学」への再編によるブルジョワイデオロギー生産と労働力生産機軸の分離による確立とその攻撃を急速なテンポで進めている。この攻撃の真の意図は、「根拠地」の解体！大学の反動と暴力による直接支配を貫徹し、70年安保に向けて反帝統一戦線を一律に弱体化することであり、大学を帝國主義の反動と抑圧の砦とすることによって、帝國主義的専制の全社会的確立の最大の橋頭堡を獲得しようとしている。攻撃は従って、在日朝鮮人学校の閉鎖をねらった外国人学校法改定、公民教育と国防教育に向けて指導要領改定等と一挙的に提出されているのである。

このことは、大学を反動と抑圧の砦としようとすると権力と、大学を反帝統一戦線の「根拠地」とし、安保闘争の全人民的拠点としようとする我々との間の、非和解的死闘が開始されたことを意味している。従って、大学をめぐる闘いは、全人民的政治闘争の主体的環であり、一切の党派と大衆の再編が、この一点に向けて開始されているのである。

この二極的な対抗関係の中で、他方で小ブルジョアジー特有の中間派が大衆に登場し始めている。この中間派の特徴は、様々な傾向をもった学園派・学園主義派である。巨資本と官僚の側面

吸引され、それに寄生し、寄生を自己の地位と生活の根拠とする
ことによって権力の尖兵として振まわっている特権的教育者と一部
の学生層を除いて、大半の学生層は今日の大学の構造の中に於る
自己の位置に不満と不安と危機感を抱いている。彼らは、学園の
一般民主主義要求に結集している。彼らに、権力の直接攻撃によ
つてこの幻想そのものが破壊されることに對して反対する限りで
は、帝國主義に對する小ブル的民主主義反対派である。だが彼ら
のこの種な意識が巨大資本と官僚の着した支配の貫徹の中で、
瓦解され、分断されたまま、その断片的組織や技術を自分らの私
有財産として、その所有者意識を起階級の絶対的理論とし、それ
を理論上のイデオロギイ、技術の生産の資本主義的分裂の主体を
その階級として幻想し、その階級を絶滅化するまで、全く反動
的である。従つて学園主義者の、大学共同幻想に基づく一般民主
主義的改良闘争は、一定の改良の果実を獲得しえたとしても、常
に資本主義の一種の徹底と帝國主義統治の一種の完成として
結果する。それは種々の没落の結果である。この没落と種
種の危機感が「自立」などのサンディカルズムを生み出す根拠で
もある。だが今日、何が重要を要する改良は、もはや、こ
の行業と統治の構造と対決し、それを解体していくことによつて
しかなしえない。まさに中間派はこの点で分解し、動揺する。開
いたこの改良の果実を展望せよという限りでは既に吸引さ
れ、進んで「大学共同幻想」と「学園秩序」を打ち砕くという点
では、敵対し、反革命秩序派として登場する。國大協が、資本や
権力への寄生者、教授会、評議会に立脚する秩序派であるならば、
日共の教育は、私有財産所有意識と大学共同幻想に立脚し、そ
の崩壊に對する危機感と防衛意識を担った秩序派である。これは、
帝國主義に寄生する小ブルジョア秩序派の二つの頭である。反帝
統一戦線はこれを一貫して闘い、首尾一貫した反対物としての、
プロレタリアート・人民の運動である。「学園闘争」自身この一
面へと結合されていくの限り、学園主義左派として秩序派に勝
つられるであろう。東大闘争における革マル派や社青同解放派の
本路は、それを完結するまでを示したのである。

六、学生共闘運動と自治会運動

この間の学生共闘運動は、自治会運動と異つて、全学共闘運動とし
て展開されている。全学共闘は新しい闘争展開である。それは何
故成功したのか。自治会運動に常に多数派の運動として開始され、
多数派の運動として終息する中で、多数派の形勢は民主主義とま
り、大量の中間派との統一戦線として存在することによつて、基
本的には体制内反対派としての役割を果たしていることである。従
つてその基本目標は改良であり、大学の機能マヒや、大学の機構
の解体は、その改良の獲得に對しての一時的圧力としてあるのみ
である。

だが今闘われている闘争は、帝國主義的大学の解体であり、大
学を全人民の闘いのコミュニーの根拠地へかえていくことである。
この改良ではなく、闘いの深化そのものを目標とする闘いは、
多数派の形勢はブルジョア民主主義をこえて、闘いと団結の内実そ
そのものを民主主義としていのである。その階級の形成と拡大
は、現にそのように闘い、帝國主義的大学の機構を解体していく
闘いによつて生まれるのであり、中間派を、その物質的根拠の解
体によつて流動させ、分解させ、獲得していくのである。

学生共闘は何に立脚しているのか。自からの組織された方と、
権力や反革命秩序派の暴力との力関係にのみ規定されるのである。
それでは何故それは大衆的基礎を獲得するのか。それは今日の大
学の矛盾の深さであり、帝國主義と非和諒的闘争が始まつてい
ることであり、一切の意味のある改良は、このように革命運動に
ついてこそ獲得しえぬことか。闘争として明らかになっているか
らである。このように闘争によつてのみ、大学の帝國主義的機構

が暴露されるからである。それを根拠において規定しているの
は全人民的政治闘争の発展と、権力との攻防戦の深まりである。
このようにして全学共闘の運動は、政治闘争において全学連に
組織されてきた部隊を中核にしつつ、コミュニー的運動をつく
り出し、反帝統一戦線に結合されて、安保闘争の「根拠地」にな
り、権力との攻防戦に向かっているものである。そしてこの運動に
参加された中間派の流動と高揚は、一方では、改良的要求の徹底
したスローガンを受け、他方で反帝統一戦線にけん引されて安保
闘争における反政府スローガンを掲げて、全学共闘との統一戦線
によつて自治会運動としてこの周囲に形成されるのである。
安田講堂死守！カーチエ神田闘争！全国学連占拠・討伐闘争は、
このように闘いの客観的条件が成熟しきまつていることを明らかに
した。今、この一挙に拡大し、飛躍した戦術をもつて押し進める
ことが問われている。

(七) 我々の緊急の任務！全学共闘全国評議会の結成

龍方の攻撃は東大入試中止を契機に一挙に迫っている。だが学
園闘争の波は、それ以上の速度で全国大学に広がっている。しか
しそれか各層バラバラの闘いで終るならば、必ず各層を徹され、
闘いの物理的衰退と拠点の後退によつて、安田講堂死守！カーチ
エ神田闘争を、縮小再生産したから進むより他ない。だが、現に
闘われている闘いは、70年代を目前にして、この闘いの最先端
に立ち、最大の戦力を獲得してきた学生運動と権力との闘いの、
全学的決戦が、全人民的政治闘争にとつても重大な意味をもつ前
面的決戦が始まっていることを示しているのだ。この闘いを、水
結的に深化し、今秋の佐藤訪米阻止闘争へと結節させていくこと
は、学生運動に課せられた最大の任務である。そのためには、全
國の運動を全学的に結合させ全学的な戦闘集団かつ組織集団へ
と編成し、拠点の設定と力量の集中、そして闘争の波及等、全學
的に計画された戦術を行使しうるようにはしなければならぬ。

そのようなものとして全学共闘全国評議会を結成し、全国の全
ての大学に全学共闘を結成することが緊急の任務となつてゐる。

この闘いの中で当面する中心的闘いは、日大闘争を中心に首都
の闘いを再編し、他方で東大闘争を引き継ぐ、次の闘いの焦点と
して京大闘争を設定し、関西の闘いもこれを軸に再編成すること
である。この全学共闘全国評議会の下で、既に闘争の組織過程で
進められている地区反戦の労働者との交流・結合を更に大規模に、
組織的に発展させてゆく可能性を切り開いていかならう。

(八) 日本階級闘争と学生運動の現在の任務

最後に学生運動の現在の任務と、戦後の重要な政治的転換点に
於る総括を通じて若干記しておきたい。

今日学生運動が全人民的政治闘争の最大の戦力として登場し、
その「根拠地」を自らつくり出しつつ、「組織された暴力」とし
て登場しつつあることはいずれのべた。その意味をより一層明らか
にするために、我々は第一次安保闘争に於る反レバ闘争と農山村
工作隊について考察を加えておきたい。

48年大学法闘争を闘いおいた全学連は、49/50年に吹きまわつ
たレッドヘッジに於いて全国ゼネスト、試験ボイコット、機動隊
導入！大学封鎖に至る闘いで、唯一学生運動のみ反レバ闘争に勝
利し、帝國主義の政治支配の貫徹を許すことなく、大学を闘いの
砦として保持しえたのであった。だがこの大衆的政治闘争は、そ
の直後の朝鮮戦争と第一次安保をめぐる階級闘争で、この突出し
た質を保持し、その質を全階級の波及へと政治的に再編していく
ことが要求された。そしてそれは労働者階級や在日朝鮮人と結合
した組織された暴力として農山村工作隊として編成された。ここ
ではそれが農山村工作隊として組織された政治路線について闘
争はさしかくとしても、反レバ闘争によつて階級闘争の拠点とな

った大学を、この全人民的政治闘争の根拠地へと転化することを、全く切斷したまま組織された暴力をつくりだし、大学を政治的無風にし、客観的には権力に明け渡したのであった。問題は大学を拠点とする学生運動を反帝統一戦線の一環とし、その中から全人民の組織された暴力をつくり出し、統一してゆく拠点と路線が必要であったのであり、そのためには、全人民的政治闘争の反帝統一戦線が現実に形成されていなければならぬのであったのである。

6年以降、我々は日本階級闘争の特質を「社会政治闘争」（三期論）として提起してきた。そしてこの階級闘争の特質は次のように結合されはじめていく。運動の客観的側面からみるならば、帝國主義権力の打倒に向けて、政治権力の打倒を頂点とする帝國主義統治構造の解体として、主体的側面からみるならば、コンミューン運動と組織された暴力として、戦術的にみるならば、中央権力闘争と地域マッセニストとしてであり、それらが反帝統一戦線の運動としてあるのである。そしてその成熟は権力闘争ソヴイエト運動として増々深まってゆくであろう。

最後に組織された暴力について検討を加えておくならば、今日要求されているのは、各個別の大学の枠をこえて全国的に単一的に組織された戦闘集団であり、その内部に小規模の行動団体をも組織せねばならない。そして拠点における闘いの武装行動隊として登場しなくてはならない。

資料

全学共闘会議全国評議会結成アピール(案)

一 新しい時代の学生運動

(1) 学生運動を先兵とする日本の階級闘争に新しい時代が始まった。一月一五日以降の、特に一八・一九両日の闘いと、これに引き続いて全国に波及し、執拗に繰り返されている学園封鎖・占拠闘争は、日本の学生運動と階級闘争を新しい質に引きあげている。東大本郷の封鎖、安田講堂を中心とする戦略的建物の占拠を中心にして「学園を七十年安保闘争の砦」「解放区」「根拠地」とする闘いは、更に一月十八日・十九日の「お茶の水・カルチエ神田」闘争の帝國主義権力に対する街頭遊撃戦からバリケード戦、機動戦力から、戦略的攻撃バリケード戦へ拡大発展した。と同時に、時を同じくして全国各地に封鎖・占拠闘争が波及し第二第三の東大闘争、第二第三の「カルチエ神田」闘争が全国の主要都市に一挙的に劇出しようる可能性を明らかにした。

十八日十九両日の闘いの教訓は、これらの防衛・攻撃戦争が我々を圧倒的に勝利に導き、帝國主義権力をして戦慄せしめ、動揺せしめるものであるということである。我々はこの攻防を全国に波及し、主要都市に戦略的拠点を構築し、戦術を全国規模で計画的に行使しなげなければならない。

(2) 帝國主義は一昨年の十・八・十一・十二の羽田闘争以来、階級闘争を切り開き、担ってきた全学連闘反戦を中心とする実力闘争とその部隊に七十年安保攻防の存亡をかけて治安弾圧攻撃を執行的に加えてきた。しかし我々の闘いは昨年の一月以来、エンブラー闘争、王子闘争、そして防衛庁、新宿、カルチエ神田、御堂筋の各占拠闘争等一貫してその実力闘争を守り、拡大し発展させてきた。そしてこの一連の闘争を通じて、我々の部隊は解体するのではなく増々拡大強化してきた。とりわけ、その最尖端を担ってきた学生連の闘いは政治闘争の領域におけるこれらの闘いを発展させてきただけでなく、その力をもって「学園を七十年安保闘争の砦」「解放区」「根拠地」と化したのである。十五カ月間の帝

場しその闘いの政治的軍事的組織的訓練によって獲得した質を更に他の拠点や大学に持ちこみ大衆の中から行動団をつくり出していかねばならない。そして全人民的政治闘争の街頭闘争に於て、独自の戦闘部隊としての役割を果していかなければならない。従って個別大学内部の闘争状況を局面の闘争状況に左右される一貫した組織規律と活動の任務を獲得していかなければならない。そのような部隊はまず根拠地に於る社会学園の中から組織されねばならない。

(3) スローガン

- (1) 今秋佐藤訪米阻止に向けてソヴイエト運動の端効的開始と全人民の組織された暴力を闘い取れ!
- (2) 日米帝國主義同時打倒の旗の下、米・日・沖縄・アジアのブルジョア・人民の共同闘争を四・六・十月闘争の中で前進させよ!
- (3) 帝國主義大学解体、権力の専制支配粉砕全国学園占拠! 全共闘運動を発展させ、大学を安保闘争! 反帝統一戦線の根拠地とせよ!
- (4) 全国の学友は全共闘全国評議会に結集し、学生運動史上三度目の転換を切り開け!
- (5) 先進的学友は社会学園に結集せよ!

國主義権力との攻防を通して、全人民的政治闘争の一つの強力な「根拠地」を獲得した我々は今そのことによって階級闘争の質的発展の時代と、権力のより深い攻防の局面を迎えており、この攻防戦に対するより全国的な計画的闘いと新しい質に統一される主体の形成が要求されているのである。

(1) 帝國主義國家権力の「大学紛争」「学園闘争」に対する攻撃・介入統制抑圧は、だからこの実力闘争と実力部隊に対する攻撃であり、我々と権力の七十年安保闘争の攻防戦にはかならない。帝國主義は、大学を七十年安保闘争! 全人民的政治闘争の砦にしようとする我々から大学を守ろうとした。そしてこの試みは大々から実力部隊を排除するたぐいに、一方で権力! 大学当局! 日共民育の反革命秩序派の反動的ブロックを結成せしめている。しかし、大学から実力部隊を排除する目的は決して、一時的な官憲の導入によって達成されにしない。大学を戒厳令下におくこととなくしては不可能である。帝國主義権力は、七十年安保攻防の第一の目標である実力闘争と実力部隊の弾圧と大学からの排除のために、学園に対する一時的な官憲の導入から「常時駐留」学園の「閉鎖」「休校」に至る権力の大学掌握に官憲導入の戦略的目標をおいている。一月十八日十九両日の攻防と二十日以降の情勢はこのことをはっきりと示している。

(2) 二十日の自民党総務会の「入試中止」決定、「坂田! 加藤会談」これに続く「四者会談」は「入試中止」から学園の「休校」「閉校」権限を帝國主義権力がその掌中に収めようとする基本動向を公然と明らかにしてきた。帝國主義は既に昨年十一月の文教制審議会、本年一月十二日自民党文教グループの動向によって一貫した動きを示してきた。自民党非主流、反主流に依拠した田中! 坂田! 加藤ラインが自民主流をかんすく文教・治安グループに敗北していく過程は、大学当局が自主的に官憲の導入、その常態化、入試権限の放棄から「休校」「閉校」権限を権力に明け渡し、意図吸引されていく過程にほかならなかつた。権力は「休校」「閉校」権を掌握するにとどまらず、更に「任命権」「選考権」の掌握「大学院大学」「専門大学」から以後六・三・三制度の改組

を中心とした教育の帝國主義的再編を三月末中教審答申に用意している。

今や大学は、内外にわたる帝國主義政治と教育の帝國主義再編の道を歩み反動と抑制の砦となるか、それとも七十年安保闘争の砦となりプロレタリアートの解放に向って血路を開くか：：そのいずれかである。

(丙)日本共産党は民権は、帝國主義の大学支配・教育の帝國主義的再編のために権力と大学官僚に学内外で精神的物質的基盤を与えた。彼らは実力闘争とその部隊に敵対し、学園秩序派として登場することによって、かつて学園闘争で右翼が果たした役割を買って出ているだけでなく、昨年以來國家権力が七十年安保と治安弾圧教育再編を基本路線としてからは、学園秩序派から一転し、権力とその基本路線の強固な基盤に転化したのである。

彼らによってたつ基盤は、自己保身に窮々とする大学官僚と教授であり、又個人主義的利益、打算で動いている学生である。そしてこの基盤は帝國主義権力によって立つ基盤でもある。

権力は実力部隊を弾圧し、排除する限りで彼らを容認し利用した。しかし「次は誰の番か」「誰が彼らを権力から守ってきたか」は自明のことである。一月二十日「入試強行」の幻想が崩れることによって、階級闘争の修羅場に立たされた時、彼らの崩壊は時間の問題に入った。彼らが権力の補完物である以上、我々は彼らとの党派闘争を自己目的化することなく、権力との闘争を通じて、この闘争の過程で、彼らによって立つ基盤を動揺させ、打砕き、そのことによって彼らを解体しなければならぬ。

□ 全学共闘会議全国評議会を結成

(丁)七十年安保闘争に向けて、全国学生運動を中心とした日本の階級闘争は高揚に向っている。学園を安保闘争の砦とし、帝國主義の大学支配と教育の帝國主義的再編に対する闘いは全大学における学園封鎖占拠を強化拡大し、大学をして実力闘争部隊と階級闘争の管理統制下におき「根拠地」とし「解放区」にしなければならぬ。

(戊)「全学共闘会議全国評議会」は個別大学の枠をこえた闘争主体である。一月十八・十九日の東大本郷の安田占拠闘争と「お茶の水カルチェ神田闘争」を経験した学生運動は今後はいかなる個別闘争も又、全國政治闘争の一環・一環成部分として、帝國主義権力に対峙していることをはっきりとさせた以上、すべての実力闘争と実力部隊とを意識的に全国的な視野と計画性をもつ闘争主体をつくりあげねばならなくなった。そしてこの闘争主体は、主要都市における戦略的闘争を組織し、これを全国的関連、特に東京および首都圏における闘いと関係付けて指導しなければならぬ。そしてこの闘争主体の力はどれほど全国的規模の広がりをもっているか、日本の大学という大学を、高校という高校を、そして中学校へとその戦線を拡大し、広く深い防禦線をつくりあげているかどうか、そしてこの防禦線が権力の攻撃とともに、全国一斉に、同時に、無数の種類と形態をとった攻撃へ転ずるように、計画的な戦術を行使しなければならぬ。